

和歌：文苑

著者	禾の舎あるじ, 窪田, 常吉, あい生, 溪川生, 蝶々子
雑誌名	龍南會雜誌
巻	46
ページ	55-57
発行年	1896-04-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4911

ぬへし。人の物にはあらじ。身を終ふるまで。心かくへし。忘るべからず。

閑居の樂（今様）

禾の舎あるじ

ふりもせず、くもりもはてぬ春の日の花をやしなふうすがすき、棚ひくゑたの窓あかく、文机きよくうちはらひ、まらぬむかしの水莖の、あとかきうつし塵の世の、心を洗ふ友として、長閑にくらすたのしみに、易ふべきものは天地の間になにかあるべきと、れもへはいつしうもろこしの、獨樂園のあるじとぞ、やがてわが身もなりにける。

丙申の春彌生の盡日

學生森寺綏來の身まかりける時その靈前に黙誦しける

禾の舎あるじ

教へこし心つくしのなみた川みなわとなりぬ君いかにせむ

花下言志

さく花の盛みせばや敷ならぬこの身も後の名こそ惜しけれ

雲雀

窪田常吉

霞たつ空にはのめくやまよりもほのかに見えて雲雀なくなり

文苑

五十五

花上月

あ い 生

花の下に眺くらして程もなく空ねもしろく月宿りけり

故郷花

ふる里の庭の櫻や咲ぬらん花の便をあさなくまつ

旅中花

水鳥のあしいそかしき旅なれど花を見すて、歸るへしやは

花開風雨多

散るはうきものとはいへど雨風の吹きてこそあれ花の盛は

稼堂陳人評、愛敬論さもいふべしや、面白し

近詠六首

溪 川 生

き、の、ふ、越、え、て、來、つ、る、き、な、ら、の、山、本、に、木、の、芽、は、る、さ、め、け、ふ、も、降、る、な、り
佩、く、太、刀、の、さ、や、け、き、月、夜、友、と、ち、と、酒、酌、み、あ、ら、ず、歌、む、し、ろ、か、な
け、ふ、り、立、つ、霧、嶋、山、の、山、ね、ろ、し、今、日、は、な、吹、き、そ、君、か、行、く、手、に
故、里、に、君、ま、つ、も、の、を、い、つ、ま、て、か、旅、に、あ、る、へ、き、只、獨、り、し、て
ま、て、し、は、し、阿、蘇、の、山、へ、を、郭、公、鳴、き、て、行、く、時、我、飯、ら、ま、し
ひ、ど、な、ら、は、引、き、と、め、ま、ま、を、梓、弓、春、つ、れ、な、く、も、行、か、ん、と、す、な、り

海邊霞

蝶 々 子

まは龍のうらみてかへるかりらねとひとつにかすむ海士のつり船

稼宮先生評、是中堅雁舟の兩翼これを夾む

海邊春眺

浪のうへも道ある御代のはる風に眞帆かけいつる千船八千ふね

全評、一篇の太平頌に充つべし

花深迷路

思ひきや花よりはなにわけ入りてかすみの底の花を見んとは

全評、別有天地非人間

山家暮烟

やま人のかへる夕やまよふらん煙かくさふたにのかけはし

後撰百人一首評釋

(承前)

禾の舍あるじ

西園寺前太政大臣

住吉の松も我か身もふりにけりあはれとおもへ秋の夜の月

二葉の時より松のすじやうをまけるものは空ゆく月なるべければあはれとねもへといふはさるとなりわか身のふりゆくをまけるは知己にあり知己の世になくば月にうたへざるをえすまらず西園寺公知己なかりきや否やあはれに情ふかき歌之